

2021年横浜ナザレン教会・受難節第四主日礼拝説教

「終わりの徴」ルカ福音書21：5～9

【聖書】

ルカによる福音書21：5ある人たちが、神殿が見事な石と奉納物で飾られていることを話していると、イエスは言われた。6「あなたがたはこれらの物に見とれているが、一つの石も崩されずに他の石の上に残ることのない日が来る。」21:7そこで、彼らはイエスに尋ねた。「先生、では、そのことはいつ起こるのですか。また、そのことが起こるときには、どんな徴があるのですか。」8イエスは言われた。「惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『わたしがそれだ』とか、『時が近づいた』とか言うが、ついて行っはならない。9戦争とか暴動のことを聞いても、おびえてはならない。こういうことがまず起こるに決まっているが、世の終わりはすぐには来ないからである。」

1 終末を語る事へのためらい

皆さんは、どうでしょうか。私は、「終末、世の終わり」についての聖書のみ言葉を読む時、戸惑いを感じます。そして、終末について他の人に話す時にも、どこか遠慮がちになってしまうという傾向にあります。聖書の中で終末について語られているものには、暴力的で過激な表現が多いので、それをいくらかでも和らげ、世の人々が受け入れやすいように、聖書の言葉を薄めてしまおうとする気持ちが無意識に働きます。信仰者であっても「世の終わり」を語る事が苦手な人は多いのではないかと思います。

私達がそのような心の動きになるのは、所謂「キリスト教系」の新興宗教の人々が、「この世の終わりが来る、滅びたくなかったら信じよ」と盛んに「終末」を喧伝する、彼らと一緒にして欲しくない、という気持ちもあるのではないかと思います。また、戦前のキリスト者の間では、熱狂的に世の終わりを待ち望む運動があったようです。喜田川信先生が、神学校の講義の合間に、次のような話しをしてくださいました。今から90年前近い、信先生が子供の頃のこと、まさに終末待望運動が熱心に繰り広げられていました。信先生も父である廣先生や他の牧師たちから、「この世の終わりが来て、みんな裁かれる。信心深い人は天国に行き、罪深い者は地獄に行く」と聞いて育ったようです。信少年は思った、「罪深い自分は地獄行きだろう。しかし、父も母も姉達も、自分と違って、みな信心深いから、きっと天国だ。このままでは、地獄で自分は一人ぼっちで面倒を見てくれる人がいなくなる。」だから、天国ではなく地獄に行きそうな親戚の連絡先を必死で探した、というのです。微笑ましい話しですが、このような熱狂的な終末待望運動の反動や、新興宗教への反感があつて、戦後の教会で

は、世の終わりを積極的に語る事は少なくなったのではないかと考えます。私達はなるべく、世の終わりを深く考えず、当たり障りのない態度で臨もうとしているように思います。それもまた致し方ない一面を持ちます。罪が赦された実感や、日々共にいてくださるイエス・キリストの恵みは私達が体験できること。しかし、「世の終わりについては、私達の日常を超えたことのように思えるからです。どうしても終末については、言葉少なにならざるを得ません。

ですが、「私達が誤解を受けるのを恐れるあまり、必要以上にこの世の終わりを語ってこなかった事が教会の宣教の力を弱めている、教会が、テレビやネット、新聞で読んだりする以上の事を人々に語るができない理由が、ここにもある」と言った方がいます。神がもたらす「終末」、「神の裁きと救い」を真剣に祈り考えようとしなないという事は、結局、終末をもたらす神の力を無視している事であり、キリスト・イエスを自分たちに都合のよいカウンセラーのような存在へと矮小化している、そのような面は確かにあるのだと思います。

終末について真剣に祈り考える事は、私達が思っている以上に、神を神として生きるうえでとても重要な事なのです。それは聖書の言葉からわかります。今日の聖書テキスト 21 : 9 にも出てくる「世の終わり」と訳されているのは、「テロス」というギリシャ語ですが、この単語には「目的」という意味があるからです。つまり、「世の終わり」について考える事は、「神の目的」、「神の計画」について考える事に通じるからです。神の目的とは何か？それは、神の支配、神の国が完全な形で私達の間に見れること。ですから、「世の終わり」について考える事は、神の国の成就について考える事に通じます。これからしばらくの日曜日、主イエスが十字架に架かれる数日前、心を込めて人々に語った「世の終わり」について、一緒に耳を傾けていきたいと思えます。

2 エルサレム神殿

さて、主が世の終わりについて説教されるきっかけとなったのは、5 節、「ある人たちが、神殿が見事な石と奉納物で飾られていることを話していた」事です。この奉納物ですが、何を指しているか、諸説あつてはつきりしないようなのですが、エルサレム神殿の奥の礼拝所の入口にあったもので、金でできた見事な「ぶどうの木」の細工ものという説が有力だそうです。葡萄の木は、聖書の中でイスラエル民族を譬えるのによく使われており、神の民を象徴する植物と言えます。エルサレム神殿には、その神の民のシンボルである葡萄の木を金で造った見事な細工が飾られていたそうです。そして、それをささげたのは、ヘロデ大王の息子の一人、エルサレムの領主ヘロデだと言われています。彼は残虐な人で、エルサレム市民から忌み嫌われていました。しかし、そんな評判の悪い領主が、エルサレム神殿に奉納したものを人々は、大いに喜んでいた様

子がここには描かれています。皮肉な事です。が、普段は社会問題に大きな関心を寄せる人でも、貧しい人々を搾取して建てた壮大な建物を大いに喜んで鑑賞する事がよくあるように、現代世界でも似たような現象は見受けられます。

しかし、見事な純金の葡萄の木のオブジェは、寡婦では飾る事ができません。このような豪華な捧げものの前には、100円足らずのレプトン銅貨二枚の寡婦の捧げものなど取るに足りないもの、なんに使われたかも定かではない程の些細な額であり、人々の賞賛的になる事はありません。エルサレム神殿に飾られ残るのは、名のある人、力ある人、富める人々のささげたもの。領主ヘロデがささげた奉納物への人々の賞賛は、エルサレム神殿の奥深くまで、この世の力が入り込んでいる様子を示しています。この事を考えると、6節の主イエスの言葉「あなたがたはこれらの物に見とれているが、一つの石も崩されずに他の石の上に残ることのない日が来る。」は、まるで、次のように語っているようです。「神のご計画によれば、二レプトンの寡婦の捧げものよりも、領主ヘロデの捧げものを喜ぶ信仰共同体は、いつかは瓦礫の山のように滅び去るしかない。」私達教会が心して聞かねばならない言葉です。

3 三つの命令

ですが、この主の言葉を聞いた人々は、その事が分かりません。新たな問いを發します。「先生、では、そのことはいつ起こるのですか。また、そのことが起こるときには、どんな徴があるのですか。」同時代のユダヤの人々は、エルサレム神殿が崩壊する時こそ、この世の終わりだと考えていたようです。それほど、神殿の持つ意味は大きかったのでしょう。彼らは、ローマ軍との全面戦争を思い描いていたのかもしれませんが。それも無理ありません。実際、各地でローマ帝国に対する反乱の火種はくすぶり、緊張は高まっていました。人々は、世の終わりの時を予め知って、それに備え救われたいと考えていたのだと思います。私達だって、滅ぼされたくはない、生き延びたい、救われたいと思います。なるべく終わりの時の到来を正確に知り、備えておきたい、その気持ちはよくわかります。

ですが、主イエスは、具体的な神殿崩壊の時期や兆候については答えず、却って次のように命じられます。8節から9節です。「惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『わたしがそれだ』とか、『時が近づいた』とか言うが、ついて行ってはならない。戦争とか暴動のことを聞いても、おびえてはならない。こういうことがまず起こるに決まっているが、世の終わりはすぐには来ないからである。」

私達は、この主イエスの言葉をどう聞くでしょうか。世の終わりなど、迷信深い古代世界の人々の妄想だから、この主イエスの言葉と私達の生活には、何

の関係もない、せいぜい、終末を強調する宗教の勧誘は相手にするのをやめよう、位なものでしょうか。

「神と人」という関係からみると、カルト的な宗教の主張も、現代世界のテレビや新聞、ネットでも声高に言われている事も、その本質は驚く程同じではないかと私は思います。現代世界の主張は、一見科学的な体裁を装いつつも、「我ら人間こそ自分達の救い主、世界の救い主」と主張していますし、「お金や権力、地位、健康、能力があつてこそ、人は救われる。」と私達に繰り返し語りかけています。更には、対立する諸国の脅威を主張して、私達の不安を煽り、戦争へと導こうとする権力者達もいます。神から何とか引き離そうとする、目に見えない人間の力はいつの時代にもあらゆる所で蠢いていると言えるのではないのでしょうか。私達が生きる現代世界は、「神と人の関係」という点では、聖書の時代である古代世界と、変わってはいないのです。

だから、そんな人の声、世の声に対して、主イエスは、今を生きる私達にも、この三つの事を命令されているのです。「偽キリストが現れたり、世の終わりが近づいた、という言葉も聞いても、” 惑わされないように気をつけなさい”、”ついて行ってはならない”、”戦争や暴動の噂も聞いても、怯えてはならない”」と。

しかし、それは難しいこと。戦争や暴動は、むき出しの暴力であり、命が危険に晒されます、怯えおののくのは当然で、この世の声に惑わされ、聞き従う事もあるように思います。この三つの主の命令を私達が守る為には、いったい何が必要なのでしょう。

4 今という時を知る

それは、今という時がどういう時かを知り、深く心に弁える事だと思います。神の目的である世の終わりに対して、自分が生きている今という時代が、どういう位置づけを持つ時かをしっかりと知っていれば、私達は、惑わそうとする人々の声に気をつける事もできるし、ついていく事をしなくてもすみます。神の導きをもってすれば、無駄に怯える事もなくなるかもしれません。だからでしょう、主イエスは三つの命令の直後に次のように言います。「世の終わりはすぐには来ない」(9節)。神の目的である神の国、神のご支配が完成するのは、すぐではない。すぐには神の目的は成就しない、と仰っています。

しかし、主イエスは別のところでこうも言います。「悪霊の頭の方で悪霊を追い出している」と主張する人々に対する主イエスの反論の中の言葉です。「わたしが神の指で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたたちのところに来ているのだ。」(ルカ 11:20)。「悪霊」とは、オカルト的なものを考える必要はありません。目には見えないけれども確かに存在し、私達を神から引き離す

力の事です。ですから、「悪霊を悪霊の頭の力で追い出す」というのは、神のご支配のもとでする事ではなく、人の世のあり方です。自分たちがこの世界の主人であると思い込んでいる人々には、神の力がこの世に現れるなんて思いもしないから、悪霊を追い出す主イエスは、悪霊の頭の力を使っている、としか考えられなかったのでしょうか。しかし、そんな彼らに主イエスは仰います。「神の支配は、神の国は、もうあなた方のところに既に来ている！、つまり、「終わりの時は、既に今、始まろうとしている」と主は宣言されます。この言葉を今日の9節と併せて考えると、「終わりの時の完成は、すぐには来ない。だが、終わりの時は、既に、あなた方の間で始まっている」つまり、今という時は、「世の終わりの始まり」という事になるのです。

5 十字架と復活により始まる終わりの時

「この世の終わりは、既に始まっている！」では、それが私達人間にはっきりと示されたのは、いつの事でしょうか？

イエス・キリストが十字架に架かって滅ぼされ、そして三日目に甦えられた時です。何故なら、終わりの時に行われるという人間に対する厳しい裁きを主イエス・キリストが、十字架で受けてくださったからです。カールバルトは、「神はただ一人イエスを選び、ただ一人イエスを滅ぼした」と言いました。罪なき神の御子イエスが、私達全ての者の罪をかぶって、神の裁きについてくださった、神はご自身の独り子を完全に滅ぼされました。が、しかし、この主イエスは、三日目に永遠の命へと甦られたのです。永遠の命、甦りの命は、この世の命。時の中にある命ではない、時を超越した命、言わば終わりの時が成就した神の御国の命の現れです。完全に人間になってくださった神の独り子が、全く新しい命に甦られた時こそ、神の国の支配、神の目的の成就が、終わりの時が、この地上で始まった時と言えるでしょう。時の流れの中に永遠が突入しました。しかし、一時的な泡沫のように、主イエスの昇天と共に神の身許へと去り、この世から消えていったわけではありません。聖霊という形で私達の上に、私達の内に注がれ、今、成長していつています。主イエスの十字架と復活で始まった終末の時は、この地上で成就の時に向けて、成長しています。つまり、私達は、今、この地上で始まっている終わりの時を、成就に向けて生きています。いえ、イエス・キリストの霊によって生かされています。

このことは、主イエスの私達への言葉からも明らかです。例えば、「あなたの敵を愛せよ」という主イエスの教え、これはどう考えてみても、時の流れの中でしか生きられず儂く滅びていく者達への教えでは、ありません。いつかは滅び去る者であるなら、少しでも長く生きて楽しむ事が第一の幸福でしょうし、自分の命を奪うかもしれない敵を愛する事など主イエスが私達に勧めるわけが

ありません。主イエスは十字架に架かる程に私達を愛してくださっているのですから。寧ろ、「敵は殺してしまえ」と仰るのではないのでしょうか。終わりの時が既に始まっていないのだとしたら、主イエスは愛する我々にそう仰るしかないのです。しかし、主はそんな事は決しておっしゃりはしない。「あなたの敵を愛せよ」と私達にご自身のあり方を通じて示されるのです。それは、私達が、主イエスがもたらしてくださった永遠の命に、今、ここで生きる事ができるからこそ、です。私達が、今ここで、終わりの時を生きる事ができないのだとしたら、主はおっしゃりはしない。できるからこそ、「あなたの敵を愛しなさい」と主は教えられるのです。

この終わりの時の命に生かす為、神の御子は、神の身分を後ろに投げ捨て、この地上に来られ、全てを私達に与えてくださったのです。全てをささげて奴隷の死である十字架の死を耐え抜かれました。完全なる滅びを滅んでくださった、そして甦り、この世の終わりが始まった事を宣言されました。そうして、この地上を生きる人間に、聖霊が注がれ、終わりの時が始まったのです。聖霊、見えないイエス・キリストが私達に与えられるからこそ、私達は、主の三つの命令を守る事ができます。私達のうちに与えられている聖霊の力によって、あらゆる目に見える人間の現実、移ろい易い人間の理想に惑わされる事なく、表面的なものの奥に働く真理を、神の現実を見つめる事ができます。この世がもてはやす偽の救い主を自分の救い主としてついて行き、滅びの道を突き進まなくてすみます。キリスト・イエスが私達のうちに住んで下さるからこそ、永遠の命を確信し、すぎまじく見える権力者の暴力に自分を明け渡さずに済むのです。

ですから、今日の人々の問いかけ、「**そのことが起こるときには、どんな徴があるのですか。**」、つまり「終わりの時の徴とは何ですか？」という問いの答えは、「イエス・キリストの十字架と復活」そして「聖霊の注ぎ」と答えることができるでしょう。勿論、今という時は、終わりの時の成就ではありません。神の国の成就是、神がもたらすもので、まだ完成していません。すぐには来ない、と主イエスは、はっきりとおっしゃいます。ですが、終わりの時は既に始まっており、その自覚をもって、今という時を生きるように、と主イエスから招かれている一人一人である事を、私達は忘れてはならないのだと思います。

私達のうちに既に終わりの時は始まっています。今日こそ、主イエスの霊を頂き、神の子として生きる時、救いの時。神の国の成就、完成を目指して、信仰の仲間と共に、今のこの時に注がれる神の恵みを味わいつつ、歩んで行きたいと、切に祈ります。